

八百屋

三遊亭円朝

青空文庫

亭「今いま帰かへつたよ。女房「おやお帰かへりかい、帰かへつたばかりで疲つかれて居ゐやうが、後ご生しやうお願ねがひだから、井戸端ゐどばたへ行いつて水を汲くんで来てお呉くれな、夫それから序ついでにお氣きの毒どくだけれど、お隣となりで二杯はい借かりたんだから手桶てをけに二杯はい返かへしてお呉くれな。亭「うーむ、水みづまで借かりりて使つかふんだな。妻「其その代かはりお前まへの嗜すきな物ものを取とつて置おいたよ。亭「え、何を。妻「赤飯あかひん。亭「赤飯あかひん、嬉うれしいな、実じつア今日けふなんだ、山やま下したを通とほつた時とき、ぽツ／＼と蒸けむ氣きが立たつてたから喰くひてえと思おもつたんだが、さうか、其その奴やつア有あり難がたえな、直すくに喰くはう。妻「まア／＼喫たべるのは後あとにして、早く用もちを仕しちまつてから、ちよいとお礼れいに行いつてお出いでよ。亭「うむ。是これから水みづを汲くんで了しまひ、亭「ぢアま行いつて来くるが、何家どどこから貰もらつたんだ。妻「アノ奥おくのね、真しん卓たく先せん生せいの許とこから貰もらつたんだよ。亭「うむ、アノお医い者しやか、可を笑かしいな。妻「ナニ可を笑かししいことがあるものか、何なんだかね、お邸やしきからいゝ熊くまの皮かわを到たうらい来らいしたとか云いつて、其その祝いはひだつて下くだすつたのだよ、だからちよいとお礼れいに往いつてお出いで。亭「何なんてツて。妻「何なんだつてお前まへ極まへまつてらアね、承うけたまはりますれば御邸おやしきから何か御ご拜はい領りやう物ものの儀ぎに就つきまして、私わたくし共どもまでお赤飯あかひんを有あり難がたう存ぞんじますてんだよ。亭「おせきさんを有あり難がたう。妻「お前まへ何を云いふんだ、おせきさんぢやないお赤飯あかひんてえのだ。亭「お赤飯あかひんてえのは何なんだ。妻「強飯おこはのことだよ。亭「ムー、お

赤飯せきはんてえのか、さうか。妻「でね、一番終ばんまひに私も宜よろしくとさう云いつてお呉くれよ。亭「己おれが行いくのにも宜よろしくてえのは可笑をかしいぢやないか。妻「ナニお前まへが自分の事ことを云いふのぢやない、女にようぼう房ぼうも宜よろしくといふのだよ。亭「うむ、お前まへがてえのか、で何なんてんだ。妻「承うけたまはりますれば、何か御邸おやしきから御拝領物ごはいりやうものの儀ぎに就ついて、私わたくしども共ともまでお赤飯せきはんをおかぢほ。門多かぢほいのに有難ありがたう存ぞんじますつて。亭「少し殖ふえたな。妻「殖ふえたのぢやアありアしない、あたりまへ。当あた然たりな話わだよ。亭「其様そのなに色んな事を云いつちやア側そばから忘れちまア。妻「お赤飯せきはんを有難ありがたう存ぞんじますつて、一番終ばんまひに女にようぼう房ぼうも宜よろしくと云いふんだよ。亭「エへ、何なんだか忘れさうだな、もう一遍べんい云いつて呉くんねえな。妻「困うるねえ、承うけたまはりますれば何か御邸おやしきから御拝領物ごはいりやうものの儀ぎに就つきまして私わたくしども共ともまでお赤飯せきはんを有難ありがたう存ぞんじます序ついでに女にようぼう房ぼうも宜よろしくてえんだよ。亭「え。妻「本ほん当たうに子供こどもぢやアなし、性しやうがないね、確しつりおしよ。亭「ア痛いてえ、何なにをするんだ。妻「余あり向むかうずね。脛むの毛けが多おほ過ぎすぎるから三本位ぼんらみ抜ぬいたつて宜いいや、痛いたいと思おもつたら些ちつたア性しやうが附つくだらう。亭「ア痛いてえ。妻「痛いたいと思おもつたら、女にようぼう房ぼうも宜よろしくてえのを思おもひ出だすだらう。亭「うむ、ぢやア行いつて来くるよ。是これから衣服きものを着きかへ、奥おくのお医い者しやの許もとへやつて参まり、玄げん関くわんへ掛かつて、甚たお頼たのま申まうします。書しよ生せい「どーれ、ヤ、是これはお入い来きなさい。甚た「エ、先生せんせいは御退屈ごたいくつですか。書しよ「別たいくつつ退たい屈くつも致いたしちやア居ありませ

着な事があるものか、イ工彼はほんの心ばかりの祝なんで、如何にも珍しい物を旧主人
 から貰ひましたんでね、実は御存知の通り、僕は蘭科の方は不得手ぢやけれど、時勢
 に追はれて止むを得ず、些とばかり西洋医の真似事もいたしますが、矢張大殿や御
 隠居様杯は、水薬が厭だと仰しやるから、己前の煎薬を上げるので、相変らず
 お出入を致して居る、処が這回多分のお手当に預り、其上珍らかなる熊の皮を頂
 戴しましたよ、敷皮を。甚「へえーアノ何ですか、臺を。真「臺ぢやアない、敷皮
 です、彼所に敷いてあるから御覽なさい。甚「へえー成程大きな皮だ、熊の毛てえもの
 は黒いと思つたら是りア赤うがすね。真「いま山中に接む熊とは違つて、北海道
 産で、何うしても多く魚類を食するから、毛が赤いて。甚「へえー、緋緘の鎧でも
 喰ひますか。真「鎧ぢやアない、魚類、さかなだ。甚「へえー成程、此処に弾丸
 の穴か何かありますね。真「左様さ、鉄砲傷のやうだね。甚「何うも大変に毛が長
 がすな。真「うむ、牛熊の毛はチャリくして長いて。甚「ア想出した、女房も
 宜しく。

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

八百屋

三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>